

マンスリー・トーク(69)

2014.8.1

木村 謹

東海道 品川宿へ行ってみた

江戸の宿駅として、これまで新宿、板橋、千住と当たりました。そこで今回、残る東海道の品川宿を見に行きました。品川は、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」に、東都品川駅より……と描き起こされている。この本は、江戸末期の享和2年(1802)から出され、絶大な人気を博した。当時は、庶民文化が爛熟し、伊勢参りなど旅が活発だった。中身はだじゃれ、軽薄、粗忽なやじきた道中記で、筆者が挿絵まで手軽に書いている。そして、一九は、著述のみで生活できた最初の作家といわれている。

品川神社は北宿の鎮守さま

品川宿は、目黒川を境に北が北宿、南が南宿に分かれている。京浜急行新馬場駅を降りると、高台に品川神社が聳えていて、これが北宿の神社。



目黒川の岸边には南品川宿の荏原神社があって、南北二社の祭りが互いに賑わいを競っている。



他に品川寺^{ほんせんじ}、東海寺など多くの寺院もあつたりして、旅籠、遊郭、飯盛女、旅人、馬方など、当時の宿場町の賑わいが想像されるのだ。街道の道幅を見ると、板橋、千住と比べても驚く程似通っていて、10メートル以内ぐらいのようだ。



問屋場跡には街道松が植えられている

隣の駅は「青物横丁」

街道を南へ辿ると、青物横丁という地名。昔はこのあたりに農家が青物の露店を出して、宿場に蔬菜を供給していた。その先には鮫洲や立会川があって、南の宿場外れには鈴ヶ森の刑場があった。



私が、ここで青物横丁駅の写真を出したのには訳がある。ここは島倉千代子の生まれ育った地。駅のメロディが人生いろいろなのだ。彼女の生涯は、歌謡曲の世界で紅白に35回出場するなど絶大な人気を続けた。その裏では、手を負傷したり、客のテープが目当たって失明寸前になったり、お人好しが災いして、結婚に失敗、巨額の負債を負ったのである。昨年、病気が悪化し、最後の「からたちの小径」を絶唱、収録して、3日後に亡くなり、人生劇場の幕を閉じたのであった。宿場には関係ないが、私はこれを書かずに居られないのだ。